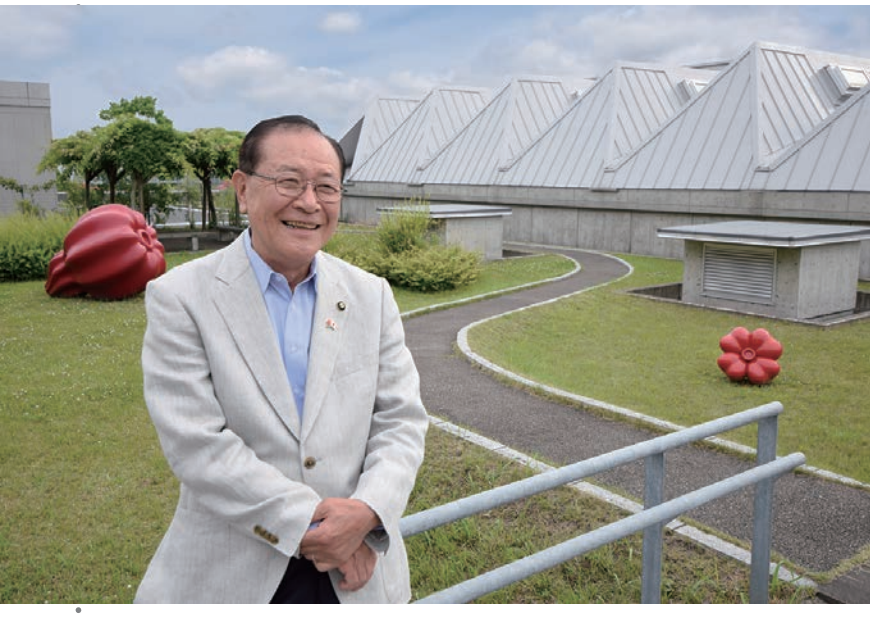
やっぱり立川！
さすが立川！
応援立川特集号

えくてびあん
別冊
立川と語ろう　立川に生きよう
Écoutez Bien　Extra Issue　No.12

表紙／希望そして前進

頑張るぞ！立川

気持ちひとつに、今が頑張りどころです



多摩随一の商業都市。多くの人が集まり動く立川で、自粛が解ける6月1日までの感染者数は14名。各市事情はいろいろありますが、この数字は市民の頑張りを表しているのでは？清水庄平市長にお話をうかがいました。

――自粛が解けました。いろいろ大きなイベントは無くなりましたが。

市長　大事なのは命です。職員にはいつも言っていることですが、何をどうしてもいいけれど、命が最優先。守るべきはひとりひとりの命です。

――昼間の人口がこれだけ多い立川で、よく感染者数が14名で抑えられましたね。

市長　いや、本当に皆さんがよく気にしてくださったおかげです。

――飲食店などは疲弊して、辛いと口にしない店舗でもその辛い状況はよく伝わってきます。

市長　本当にそうですね。そのためにいろいろな会社が、運転資金が足りなくなってお金を借りなければならなくなった時、その金利部分を補填してきましたし、6月からは、売上が一定額以上減少した中小事業者が負担する家賃について40万円を上限として、また複数の事業所を経営している場合には200万円を上限として支援金を出すことにしました。辛いけれど、頑張りどころですね。新しい生活様式を定着させて、お互いに工夫しながら、再び賑わいを取り戻しましょう。

――そうして何とかこの窮状をしのいでもらいたいということですね。

市長　その通りです。

――立川は大きな街区のオープンや多人数が動く団体などもあり、市長としては人の動きを心配されていたのではないですか？

市長　もちろん心配していました。人の動きによる感染の心配もありましたが、人が集まらないことによる大きな穴も心配していました。けれど、そこはさすがでした。ルールを守り感染を拡大しない努力の中で自粛解除を迎えました。私は恵まれています。私は終戦の日の少し前に生まれたのですが、母は部屋と防空壕を行ったり来たりしていたそうです。防空壕の中で生むわけにはいかないから、いざとなったらこの子と一緒にどうなっても仕方ないと覚悟を決めていたとよく聞かされました。人それぞれ、人生の中には1度や2度、命がけでやる、あるいは命がかかっても仕方ない、ここが頑張りどころだと感じる瞬間があるのではないでしょうか。この度は私自身も頑張りどころでした。まだ終わったわけではありませんが。

――第二波と言われますが、この後、みなさんに何を伝えたいですか。

市長　経験がある分、行政としては迅速に対応できるかなと思っているわけで、市民とひとつ心で対処したいですね。人生におけるこのような危機には、みんなで一緒に頑張ってもらわないとなりません。利子補給や家賃負担への支援などはできますが、お店の運営を代わることはできません。それぞれ皆さんの持っている能力、やる気しかないわけです。最初が頑張れたのですから、次もなんとか乗り越えていただきたいです。皆さんが楽しみにしていたお祭りなどは、それこそが辛抱。先を楽しみに耐えていただきたいですね。ここで頑張れば、来年2倍楽しいのではないでしょうか。

――地元メディアに望むことは？

市長　現状をどんどん発信してもらいたい。そうすることで我々にも現状が伝わって来るし、苦しんでいる人も同じ苦しみを持っている人の存在を知ることができます。孤立しない、させない。そこが頑張りの燃料になるやもしれません。立川の発展を見ればわかるように、力強く頑張ってきた人たちが集まっているのです。立川を含む多摩26市の市長会では立川の発展の秘訣をよく聞かれます。が、それは一重に皆さんの頑張りだけなのです。もともと頑張る力を持っている人たちが作り上げてきた街だからこそ、なのです。自負と希望をもって、この先も乗り越えていただきたいです。地元メディアのみなさんには、そうした街の中の1つひとつの頑張りをどんどん発信していってもらいたいですね。それがまた活性化につながりますので、よろしくお願いします。

新しい生活様式は〈Withコロナ〉

立川で、ローカルメディアに思うこと

**自粛中に国文学研究資料館ではひとつの動画を配信しました。
内容は、江戸時代よりずっと以前から、日本には疫病とともに暮らしてきた長い歴史があるということ、
そしてそのことが国文研にある書物に記されていることを知らせ、
今そこに目を向けることこそ実は大切なことなのではないか、と問いかけるものでした。
6月3日、テレビ電話システムでキャンベル館長にお話をうかがいました。**

ぷらっと国文研のウェブサイト

――配信された動画を拝見しました。25分くらいありましたがあっという間でした。それをSNSでシェアしたところ、フランスから「立川万歳！」というコメントをいただきました。

キャンベル　動画をご覧頂いてありがとうございます。コロナは敵ではありません。これは戦争ではない。コロナウィルスは人類と共に生きる気満々、生きる能力はないし生物ではないのですけれども、共に生きたい。これからはワクチンもでき検査も進み治療薬などの医学的発展が進むと思いますが、ウィルスが完全に無くなるわけではなく、共存しなければならないのです。医療現場や医学の専門家たちの大切な研究や判断がなされていきますが、私はアフターコロナではなくウィズコロナと考えています。私たちが専門とする文系科学の今までの歴史的体験として、日本列島の中で感染症とどのように付き合ってきたか、予防、治療、守り合い、失った人やモノ。空間だけでなく時間的距離をどのように保ちながら社会として結び合うのかということ。国文学研究資料館に保管されている多くの書物の中に、日本の中だけでなく世界に発信してもよい知恵や経験が、人々の歴史記録や文学という表現の中に記されています。特に精神的な思いというものが刻まれているので、丁寧にそこを汲み出して共有していかなければならないと思っています。

ご覧頂いた動画を配信したその日に、大手出版社から詳細な企画書と共に、このことを本にしたいという依頼が来たので、今それを進めています。私ひとりが書くのではなく、万葉集から近代まで、各時代各ジャンルの専門家が持ち寄って、日本の古典から読み解く感染症、まさに「日本古典と感染症」というテーマで、私が編者で準備しています。できるだけタイムリーに、私たち研究者が積み上げてきたものを一般の方に向けて提供し、ウィズコロナを実現していきたいと思っています。

――それぞれがそれぞれの立場でウィズコロナを実現するわけですが、えくてびあんのようなローカルメディアに対して館長はどのようなお考えをお持ちですか？

キャンベル　私が立川に来たのはちょうど3年前のことです。私が館長に就任する前に、えくてびあんの某記者に東京大学の私の研究室に来ていただきました。私の、立川とのリアルな接触、接点が実はローカルメディアだったことを思い出しています。

私には、立川に対しての予備知識、地元観が無かったということ、それから中央線沿線に住んではいるのですが常に都心に向かって動いてきたという長い歴史があって、立川は私の関心の範疇にはありませんでした。用事がないことに対して、人はだいたい視界に入らないですよね。全国の大学共同利用機関ではあるのですが、立川市にある国文学研究資料館の長になるに当たって、ローカルメディアの水先案内で、まず地域のどういう方々とお目にかかって、自分がこれから新しくしていくことを伝える、つまり顔つなぎすることを促されました。そのことは、私の仕事のどこにも書かれているわけではなかった。淡々と館長室に入って、全世界の研究者とあるいは全国の様々な研究者や学生たちを相手に通じていけばよかったのかもしれません。でもそうではなくて、私たちの全国的な大学共同利用機関が実は地元にあるということ、私にとっては幸福なことに最初からそのきっかけ、口火を切らせてもらえたことがとてもありがたいことでした。

ローカルメディアがとても重要だということ、人々の行動を促す力があると思ったのは、新しい職場でその職場のあるコミュニティの人たちに目を向けて、このコミュニティを自分の仕事の半径の中に組み込んでいくことを実現させるのに、実はローカルメディアの存在がとても大きいと思ったことによります。ローカルメディアの取材の元になり記事になって、私たちの活動が地域に少しずつ知られるようになりもしましたが、取材を受ける私の立場からすると、実はそこがドラえもんの扉ではないけれど、いろいろな所と繋がっている扉だったのです。ここに警察署がある、駅がある、大きな会社がある、寺院や神社がある、商工会議所がある、個性的な美味しい飲食店がある、それは地図を見ればわかりますし、検索すれば情報は取り入れられます。それで私たちの仕事は行うことができるのです。けれども、ローカルメディアが介在することで、実はそのひとつひとつに人がいる（笑）。当たり前のことですが、同時に、その人たちに対して私がいるということを知っていただけるのです。すごく単純なことですが、人というのは不思議なもので、資本金がいくら、収益がいくら、駅なら乗降者数とか、それはとても大事なことです。大事ではあるけれども、そこをコミットし実際にそこを動かしている人たちに会ってみると、違うんですね。

国文研に社会連携推進室という部署を作りました。地域の社会と連携する、地域と私たち研究者がやっていることは無関係ではなくて実は繋がる。繋がることによって、私たちが私たちの成果を地域に還元することができる。それだけでなくて、私たちの基礎文系科学的な知見ですとか基盤的な仕事に、その繋がりがすごくプラスしているということがわかりました。これは理屈とかきれいごとではなくて、今西前館長の時代からえくてびあんとの関係があり、密着取材してくださり、それを私が引き継いだわけです。ローカルメディアが媒介して、一見異なることを一生懸命やっているプロフェッショナルが繋がって起爆力を創り出しているのです。私はいろいろな地方、地域で仕事をしてきましたが、他でもないこの立川でそれを実感し、国文研の中でみんなできちんと人員も予算も獲得し、人を増やし研究者が地域と向かい合っていろいろなことを進めていくその骨組み、足場のようなものができたところです。

ボランティア的ないろいろな組織、団体があります。同業種が集まって作っている団体はお互いが支え合い刺激し合うのですが、そうではないローカルメディアだからこそ、車のハブのようなものになっていろいろな人を結び合わせることができる。私たちのような機関と土地開発の会社、あるいはフィギュアを創る会社、商工会議所とか昔から立川の文化を守ってきたお寺や神社。繋がることによって、異なる職種の人たちがそれぞれの資源を出し合って新しい価値を生み出していくことができているのです。

――館長にとって立川はどんな所ですか。

キャンベル　私はまだ立川に3年しかいません。が、立川スピリットというものを感じています。研究者としてこの3年間いろいろなことをやってきているし、本も出していますし課題も抱えてやっているわけですが、立川に来て非常によかったことは、立川には人文系の研究集団を有益な戦力にできる眼差しを持っている人たちがいるということです。それはよく感じます。東京大学の教員を17年間やっていた時、駒場にいました。駒場にはすばらしい進学校もありますし、すばらしい文教施設もあり研究者もたくさんいます。私の目が利かなかった、努力が足りなかったのかもしれませんが、立川のようなことはありませんでした。車で5分、歩いて10分、自転車で7分くらいの所に、私たちの研究に直結する人々がいて、他流試合ができます。全然違う分野に聞く耳を持てる人たちが何百人も集まって私たちの話を聞く、あるいは一緒にこんなものを作っていこうというブレーンストーミングできる人たちがいるということ、これは他の地域ではなかったことです。

以前立川青年会議所から子ども記者が取材に派遣されてきましたが、子ども記者の取材に応えてくださいという申し出などは今まではほぼありませんでした。えくてびあんの某記者のように、立川にはこれほど豊かな、好奇心があって、ある意味無謀な、都会では出逢わないような獣たち（笑）。猪のように猪突する女性も男性も、老いも若きも。これは立川スピリットだと思います。まだ十分にはわかっていないかもしれませんが、地域誌などを読んで知った中に、周囲の自治体とは異なる街の成り立ちから来るスピリット。ある意味陰影が非常に深い街です。生まれ変わって発展して、またそこから発展しようと大きなステップに踏み出している。実践的な立川人、やる以上はどうやってやるか、その機動力が速い。まだ3年しかいませんが、とても愛おしく思っています。

――コロナ共存ではありますが、今後の国文研の活動を差支えない範囲で教えてください。

キャンベル　先ほどお話した社会連携推進室をどうやって立ち上げていくか、具体的にいつからどのタイミングでどうするか、プランニングしています。去年の秋から始めている「一冊対談集　クリエーターと語るこの国の古典と現代」を1日も早くやりたいですね。いろいろな仕事をしているフロントランナーたちを立川に、あるいは多摩地域に招いて、市民と一緒にワークショップのような形で公開対談する。そしてそれを立川から『中央公論』という月刊の雑誌に載せて発信していくものです。近々にリモートで1回できると思います。動画という形でライブ発信しますけれども、できれば地域限定。今回も衝撃的なゲストをお願いしていますが、地域の方々に登録していただき、限定配信する中で、チャットとかTwitterを使って参加者の皆さんと少しやりとりできるようにしようと思っています。電子媒体になっても地域性を重んじたい。その後は7月になるのか8月になるのかわかりませんが、少しずつ新しい生活様式に則って人々が集まれればなと。私はあのGREEN SPRINGSのすてきな空間に皆さんを誘いたい。すばらしい導線ができたじゃないですか。北口を出てたましんがあって、そこにたましん美術館があって。歩いて行くと芝生があってステージがあって、その先に国語研があり国文研がある。さらにはアリーナへと続く。まさに一筆書きのような回遊路。スポーツは武ではないけれど、言ってみれば文武両道であり、すばらしいエンターテインメント、学習も、精神的な拠り所も、あるいは美味しい食べ物も。全国的に見てもとてもいい気流が流れている。立川がもうひとつ立川らしいカラーを打ち出せる、空間と時間ができるのではないかと思っています。

たましん本店2階に国文研が紹介した多摩地域に関する書物、資料を展示する常設コーナーを作って頂くことになりました。本来なら7月の下旬からオリンピックに合わせて国文研で特別展示を企画していたのですが流れてしまいました。でも、来年2月から4月にかけての期間、文化庁の日本博の一環として特別展示を行います。そこではただ作品を並べるのではなく胸躍るものにしたいと思っています。国文研の活動のひとつ「ないじぇる芸術共創ラボ」の理念、国文研の所蔵する古いものが新しいものを生み出していくということを皆さんにお見せしていきます。展示は来年2月からですが、その前哨戦として初秋からリモート対談などを行い、動画コンテンツとして発信する予定です。

この展示には文化庁に申請した金額を満額いただけるという奇跡に近いことがおきました。満額とは言え全然間に合わない金額なので、これから地元企業の方々にも協賛をお願いし皆さんに喜んでいただける展示にしてまいります。

今、ローカルメディアにできること

頑張るよ！立川と

コロナ禍の立川で何をしてきたか、何をしようとしているのかをうかがいました。

エフエムたちかわ

物事との繋がりを作る、繋げるインターフェース、それが最大のミッションだと思っています。防災などについて言えば、日頃の備えはとても大切ですから、最悪を想定した準備はしております。FMたちかわの本社はもちろん、GREEN SPRINGSに新設されたサテライトスタジオにも配電盤を備え、発電機を繋げ、停電時でもシステムを動かせるようになっています。そうした備えも地元との繋がりだと思っています。コロナ感染拡大を受けて最初に行動に移せたのは、学校から子ども達への発信でした。電話やネットを補足していくのもラジオの役目です。昭島市の小中学校全19校、ラジオで学校と児童、生徒を繋ぎました。こういうことはスピード感をもってやらなければならないことですから、お声がけした近隣の教育委員会から唯一お返事のあった昭島市へすぐに出向いて決定しました。内容は、学校で配ったプリントのことや、先生方や家での子ども達の様子、オリジナル体操をしたり、最後はみんなで校歌を歌ったり。分散登校が始まるまでの間、3週にわたり各校3回ずつ放送しました。こういったことは地域メディアにしかできないことではないでしょうか。

立川警察署のニュースや立川消防署のニュースなどもそうです。例えば免許証の更新がストップしていたことや振り込め詐欺の最新手口についてなど、放送を聴くことで被害を免れる方もいるかもしれません。エフエムたちかわの思いは、FMラジオを聴いてくださっている方々に対して『立川の素敵な各ポイントに興味を持って頂き、来て見て感じて頂く』この様に繋げられればいい、それだけです。

エフエムラジオ立川株式会社
代表取締役社長　梶範明さん
プロフィール：北海道出身　平成19年開局より代表を務める。

J:COM 多摩

会社の方針もあり、まずは社員の健康リスクを考えてロケはしない、社内は最少人数で対応しました。その中で基本的に、市民の安心安全や生活支援に繋がる情報を中心に、4月上旬から今日に至るまで、番組を放送しています。社員の健康リスクは大事な問題で、放送の義務というものがあり、罹患したら番組が流せなくなります。緊張感持って対応しています。今ようやく落ち着いてきて少しずつ取材ができるようになってはいます。が、まだまだ行政関係以外は取材できない状況です。外部の規制がかかっているので、取材メンバーは行きたくても行けないというのが本当のところです。ただ、リモートでのお客様との出会いはあり、立川市長などは4回くらい登場いただき市民へのメッセージを発信していただいています。コロナ関連情報は医療従事者への感謝のメッセージなども含めて、リモートでできるところや提供された動画など、できるだけタイムリーに放送してきました。

6月に入り7月に向けて、やはり立川に元気を届けたいし元気になってもらいたい。新番組「StayHome≠東京つながるメッセージ」や「テイクアウト＆デリバリー情報　多摩 家ごはん！」などは地元のおいしいレストランなどを紹介して街に勢いをつけていく番組になります。もうすでに始まっていますが、現状ではリモート取材です。J:COMは地元の活動をしっかり流すというのがミッションなので、スピード感持って正確な情報をお伝えして参ります。地元メディアの皆さんと一度座談会でもやりましょうか。各イベントも中止になってしまったことですし、何かみんなの考えを持ち寄って、立川を元気にしていきましょう。

株式会社ジェイコム東京
多摩局　局長　栗原尚孝さん
プロフィール：埼玉県出身。企業のケーブルテレビを皮切りに、33年間ケーブルテレビに携わり、2018年より現職、今日に至る。

webメディア
立川経済新聞

立川経済新聞の運営を引き継いでまだ半年です。立川経済新聞自体はもう13年くらいになるのですが、シーズプレイスが運営するようになったのは去年の11月からです。私は元々ワッカチッタという子育て支援団体を立ち上げていまして、何度か当時の立川経済新聞さんに取材をしていただきました。そのご縁もあり、またシーズプレイスが「創業支援・就業支援」「子育て支援」「ダイバーシティ」「地域活性化」という4本柱を中心に地元で頑張っている会社だからぜひ運営を引き継いでいただけないかと言われてやることにしました。シーズプレイスとしてもメディア事業をやっていきたいと思っていたので、好機でした。だから自社ネタもいっぱいあります(笑)。平日1日1記事という「みんなの経済新聞」本体のノルマはきついけれど、みんな頑張っています。今では休日も更新するくらいネタが集まる時もあります。立川経済新聞に掲載されるとYahoo!ニュースのカテゴリーにも掲載されるというのは魅力です。そのメリットを生かして取材させていただいています。1つひとつ、きちんと取材して誠実に記事にする、それがモットーです。

私たちも経営者ですから、コロナ禍のお店の方々の悩みは共有できました。苦境の中、動けない中でやろうとする、行政にはない商店街の力というものも同時に感じました。ですからできる限りの協力はしたいなと思っていました。頑張っている人たちを、小ネタでもいいので拾ってきて、それを発信することで他の地域にその頑張りや繋がりが広がっていくこと、そのお手伝いがミッションではないかと思っています。

株式会社シーズプレイス
取締役副社長
立川経済新聞　編集長　石橋由美子さん
プロフィール：埼玉県出身。学生時代から多摩地域には親しみ、現在は立川在住。地域に密着する毎日。多くの団体や組織、個人とも繋がりをもって活躍中。

webメディア
立川新聞　地域密着新聞ネットワーク

この錦町サンパークビルの中にあるお店の取材から立川新聞は始まりました。2011年の震災後に街の役に立ちたいと思って始めたのですが、なんとかここまで続けて来られてよかったです。開発されてどんどん立川が変わる中で、こうした小さいお店の集合体こそが立川らしいかなと思っています。立川を立川らしく、おかげで写真の勉強はずいぶんさせてもらいました。

休業要請解除後、普段しっかり休むお店が昼間から営業していたり定休日に休まなかったり、少しでも売上に繋げたいんだなという気持ちや、口にしないけれど辛さや痛みは伝わってきました。子ども弁当を始めるお店の様子を見て、逆に励まされたこともあります。この間立川市内は隈なく廻りました。地元は羽衣町なのですが、砂川町や若葉町の方もずいぶん廻りました、自転車で。

今できることは、「テイクアウト」に代表される情報発信だなと思っていましたから、直接お店をお訪ねして撮影できるところは撮影して、テイクアウトマップを作ってそれをアップしたり記事にしたりしました。SNSも随分変わってきましたので、いろいろ試しながら発信しています。テイクアウトについてはどこの媒体もみんなやっていますし、状況が変わってきているので、これからは営業再開後の情報をどう伝えていこうかと考えているところです。本業は、お店や企業のホームページを作ったり、グーグルの検索にひっかかるような仕組みのお手伝いをしています。写真の提供もできます（笑）。今日はライカですが、普段はニコンです（笑）。

株式会社エリアダイレクト
代表取締役／エグゼクティブプロデューサー
立川新聞編集長　戸田裕二さん
プロフィール：北海道出身。立川との関係は30年以上になる。立川新聞は恵比寿新聞を代表とする地域密着新聞ネットワークのひとつ。立川新聞に掲載される写真はとてもおしゃれ。

「9度ハロ」
5月30日、立川上空に現れた珍しいハロ。
通常は太陽の周り、視野半径角22度のところに白く光るリングとして見えるハロ（日暈）ですが、この日はその内側にもう1つハロが見えていました。
『9度ハロ』と呼ばれるものだそうです

webメディア
いいね！立川

Webを使って地元地域のお店をサポートすること全般が本業で、そのツールのひとつが「いいね！立川」です。2011年に始めました。ある時から読者さんが見たい情報をお店に探しに行くというスタイルに切り替え、面白い情報を見つけたらすぐにアップするようにしたところ、グッとアクセスが伸びました。お店のサポートをしたいという目的はもちろんですが、webの地域メディアとして成立するのに一番何が大事かというと、「毎日ついつい見てしまうサイト」というポジションにいることです。そうなるためには、お店情報もいいのですが、むしろ普段人が気が付かないようなこと、街のちょっとした変化などもいいんじゃないかと。うちは立川中の「いいね！」な情報をあげていくサイトですのでポジティブな情報だけをあげています。

コロナといえば今回のことで飲食店がいかに普段からギリギリの経営をしているかということを、一般の方も知ったと思います。そんな飲食店をみんなで支援していくために、「いいね！立川」の読者や企業さんから支援金を出していただいて、その資金を元に飲食店単体では発信できない情報を「いいね！立川」が発信していく、そんな企画を今後進めていきます。情報発信は地域経済を活性化する最も重要な要素だと思っています。そしてそれを継続するには資金は必要になってきます。「いいね！立川」がやりたい商業サポートとは、店主さんが本当に好きなことを商売にしているお店の、「いいね！」なところを読者の心に刺さる言葉で記事にするということです。そういった情報発信の体制がうまく機能していけば、立川は自分の好きなことをして商売が成り立って行く街として、人が集まって来るのではないかなと思っています。お店単体ではできない発信の部分をサポートしていくことが「いいね！立川」のミッションですね。

株式会社エナゲピューラ
代表取締役
いいね！立川＆国立　編集長　久米収さん
プロフィール：愛知県出身。一橋大学在学中にweb事業に携わり、卒業後地域との関わりの中にその経験を生かしお店サポート事業を立ち上げ、その1つのツールとして「いいね！立川」を始め現在に至る。国立にある事務所で一橋大学の学生にメディア経験を積んでもらい、大手企業に就職すること以外にも道があることを知ってもらおうとしている。

共存コロナウイルス ここではこんな活動が

暮らしの役にたっていきたい

社会福祉法人 立川市社会福祉協議会

地域活動推進課長

山本繁樹さん

――社会福祉協議会（以下：社協）の活動範囲はとても広くて、サービス対象者も多いですが、この感染症関連の社会状況で普段とは異なることもあったのではないでしょうか。

山本　そうですね。緊急事態宣言の間は感染予防しながら一部在宅勤務も取り入れて、相談対応は続けていました。「あんしんセンター」「地域包括支援センター」などの相談はやはり絶えませんから。厚労省から通知が出ていて、障害者や高齢者の通所施設については密にならないよう、個々に確認をとりながら在宅で大丈夫な方は在宅で、また通所施設をご利用なさる方には規模を縮小しながらサービスは提供していました。

――介護などはどうされているのですか。

山本　医療現場が大変な状況ですが、介護・福祉関係者もそれは同様で、特に介護は密接にならざるを得ない。ですから、立川ではどの施設もいろいろな配慮をしながら利用者対応しています。

――障害者や高齢者でなくても、このコロナ打撃で困窮されている方も多いと思いますが。

山本　はい。「くらし・しごとサポートセンター」では、新型コロナウイルス感染症の影響による休業や失業で生活資金にお困りの方々に向けた、緊急小口資金の特例貸付を実施しています。3月25日から申請受付を開始したのですが、2300件以上のご相談がありました。

――休業しなければならないのに出費はあるわけですものね。住むところさえ危うい方もいらしたのではないですか。

山本　はい。住居確保給付金――これは離職や廃業、休業などにより収入が減少し、住居を失うおそれがある方を対象に、一定額の家賃の給付をするものです。相談はこれまでに900件以上ありました。

――そのような助成があることはありがたいことですね。地域と密接に繋がっている社協ならではの活動というものもありますか？

山本　社協では5月1日から来年の3月31日までの予定で、新型コロナウイルス対応地域支援寄付金の呼びかけを始めています。現在までで12件、166万7千円の寄付がありました。

――その寄付金の使い道も公開されているんですね。

山本　はい。このような活動に使われますとお知らせしています。すでに2件の助成が決まっていて、1つはひとり親世帯へのお米配布、ひとり親世帯の子どもたちが通っている学習会再開のための非接触型体温計購入に、もう1つは就労継続支援事業所によるひとり親世帯へのサンドイッチ配布です。

――確かに飲食店などの存亡は危機的状況を迎えていますが、このひとり親世帯は統計的にもともと所得が低い、とくに母子世帯はこのコロナ下で困窮しているのではないかと想像されます。

山本　そうなんですね。感染症の影響で職を失った方もいらっしゃいますし、途端に暮らしに困ってしまうんですね。ではそういった状況に地域の工夫ではどうするかと言いますと、「ひとり親の会　立川みらい」さんがありまして、社協ではそこと繋がっています。フードバンク立川とも連携しておりまして、各種食品の寄付が届き、それを立川みらいさんからひとり親世帯に配って頂いたりしています。今回は、個人での食品寄付もありましたが、市内のいろいろな団体から大量のご寄付をいただきました。ひとり親世帯だけでなく高齢者施設などにもお配りし、利用者さんだけでなく職員にもいただき大変喜ばれました。

――なるほど。それが立川の底力なのですね。

山本　寄付金の呼びかけに応えていただけていること、地域の皆さんの繋がりを知ることができたこと、またフードバンクなどにご寄付くださる個人や団体があることなど、今後の立川の力に繋がっていくのではないかなと思います。

頑張るね！立川で

おにうーまーイーツ（おに Umar Eats）

錦商店街振興組合　広報イベント担当

平田晃一郎さん（まぜそば専門かぐら）

――錦町を中心にデリバリーサービスをされているそうですが、どなたが配達しているんですか？

平田　僕です！

――え？ 他には？

平田　今は僕が1人で配達しています。

――おにうーまーイーツは事業なんですか？

平田　錦商店街振興組合が始めた配達サービス事業です。

――このおにうーまーイーツのすごいところは、北口にも加盟店があって、立川の南と北をいとも簡単に繋いでしまったことですよね。

平田　それ、気づいてほしかったんですよ。ありがたいし嬉しいです。東京都の商店街グランプリで特別賞をいただいた時に、東京都の商店街連合会の方が「今は世代交代で、若い力を取り入れる商店街の器も必要だ」とおっしゃっていたんです。「よそ者、バカ者、若者」という有名なフレーズがあるじゃないですか。この錦商店街でなぜいろいろなことができるかというと、やはりもともとこの商店街の持っている器が大きいということではないかなと思います。そうした土壌があったから僕がいろいろな提案を出すことができたんですね。それに僕は山口県の田舎育ちで地域の横の繋がりは当たり前のことだったんです。それでこの錦に来た時に、ここで人にスポットをあててなんとか繋がりを表に出せないかなということでイベントやらせてくださいとか広報やらせてくださいとお願いしたんです。

――そうですね、商店街グランプリの時も、商店街の人の顔がわかるイベントになっていましたものね。

平田　そうしたイベントでいろいろ北口の人たちとも繋がってきました。北とか南とか、大変とかいうことはまったく感じなかったですね。よそ者だからできるのかもしれないですね（笑）

――おにうーまーイーツの加盟店も増えているそうですね。

平田　はい。飲食だけでなく、錦町にあるドラッグストア　ナンコードーさんの生活必需品なども配達します。取扱品も増えています。

――なんだか高齢者や独居の見守りもできてしまいそうです。

平田　お！気づいたですね～。そこも狙っているんです。安心安全な住みやすい街を作るために、商店街が地域コミュニティの担い手になるべきだとも言われて、そうだよね、商店街にできること、商店街だからできることなんじゃないかなと思ったんです。

――買い物弱者へのきめ細かいサービスもできそうですね、大変だけど。

平田　電球の取り換えとか家具の移動とか、それをおにうーまーイーツに乗せてそこまで持っていけたらなと思っています。スマホを通して商店街がおうちにおうかがいする、そんなイメージです。

立川青年会議所（Junior Chamber International Tachikawa 文中以下JC）

立川JC 緊急支援プロジェクト

～小学校再開に向けて～

立川青年会議所のJAYCEE育成特別委員会（委員長：常任理事　長澤潤さん）では、今までJCが毎年取り組んできたあらゆる活動が、この度の感染症拡大予防のため全く実行できなくなってしまったことから、理事長始めメンバー全員で考え出した「緊急支援プロジェクト」を立ち上げました。6月に入り緊急事態宣言も解かれ市内の小学校も再開が待たれる中、大事なのは児童や先生たちの身の安全。給食も開始されると知り、まず畠山理事長自ら消毒用アルコールの確保に努め、またメンバーの中にアルコールを取り扱う仕事に従事する人もいて、結果立川市、国立市、武蔵村山市の全小学校に、15リットルずつ配付することができました。配付したのは同3市に在住在勤のJCメンバー90名。費用と時間を出し合って地域に取り組みました。給食開始を前に、どの小学校も感謝されていました。

立川市立松中小学校　福原校長（中央）とJCメンバー

表紙

花言葉は「希望そして前進」

ガーベラは春から夏、そして夏から秋にかけて咲く花です。希望を胸に冬の寒さに、夏の炎天に耐えて美しく花開く。色とりどりに咲く花の、どの色にもマイナスイメージの花言葉はありません。どんなこともプラス思考で前に進む、立川スピリットを表す花にふさわしい、そんな気持ちで撮影しました。立川在住はもちろん、在勤でも通学でも、お買い物でも遊びでも、立川に触れればあなたは立川人。「にぎわいとやすらぎの交流都市立川」で心ひとつに希望を持って！

えくてびあん ©

別冊えくてびあん　応援立川特集号

令和２年６月25日発行
発行　有限会社えくてびあん
〒190-0023　東京都立川市柴崎町2-1-10　高島ビル4F
TEL 042-528-0082　FAX 042-528-0065
URL　https://www.tamatebakonet.jp
発行人　黒須 環
企画・写真・編集　えくてびあん編集スタッフ
デザイン　池田隆男（WATER DESIGN ASSOCCIATES）
印刷　三浦印刷株式会社・DECK C.C.

無断転載を禁じます。

かたこと

◆2020年初めての別冊えくてびあん「応援立川号」をご覧いただきありがとうございます。また清水市長始め、多くの方々にはコロナ対策でご不便な中、お忙しい中にご対応いただき、誠にありがとうございました◆現状に困窮し、今後に不安を感じる方々がいる。市民の小さな声を拾ってほしい、そんな思いをどう解決するか…。立川市社会福祉協議会にはきめ細かなサービスがありました。街の動きには「今、やれることをやろう」という若い力がありました◆もうひとつ、媒体としては大きな挑戦。それは地域メディアを繋いでみようという試みです。今回は、立川で積極的に発信されている各メディアの代表の方々にお顔を出していただきました。こんな方々が立川を活性化していこうと頑張っています。またここから何か繋がりができていくといいなと期待します◆キャンベル先生の言葉を借りれば「コロナは共に生きる気満々」。感染しない、感染させないを忘れずに、心の距離は近づけて、えくてびあんも一緒にがんばります。

えくてびあんスタッフ一同